

館林紬の再興目指す

有志3人で企業設立 知名度向上図る

館林

消滅の危機にひんしている館林市の伝統工芸品「館林紬」を再興させようと、市内の有志が新たな企業を立ち上げた。「幅広いジャンルの製品に取り入れたい」と館林紬を再定義し、衣料以外にも広げて新しいブランドに育てたい考えだ。
(小松田健一)



ツルをあしらった館林紬のシンボルカラーを手にする安楽岡さん(左)。左は飯塚さん、右は中村さん=いずれも館林市で

ツル描いたシンボルカラー考案

7月29、30日に開かれて盛況だった館林紬を紹介するイベント(飯塚さん提供)



館林紬は鎌倉時代発祥とされる綿織物で、江戸時代から農家の副業として盛んになった。「唐棧縞」と呼ばれるしま模様が特徴だが、戦後は服装の洋装化や安価な輸入品の台頭で需要が減り、現在は1社だけが在庫の生地を製造している。この会社は後継者不在で新たな生地を製造していないため、近い将来になくする可能性があった。
こつした現状に、市内でビジネスホテルを経営する安楽岡紀子さん(47)、同市出身で現在はパンクグラフィシ

ユでアパレル業を営む飯塚はる香さん(33)、設計事務所経営の中村喬さん(57)の3人が今年7月、「地域の貴重な産業文化を残さなければ」と、合同会社「紬組」を設立した。
3人は、館林紬とどのようなものか広く知ってもらうようとシンボルカラーを考案し、商標登録を出願中だ。ツツジの赤など館林の特色を示した6色を使った。中央には「上毛かるた」の読み札「つる舞う形の群馬県」で、館林市はツルのくちばしに位置する」と意気込んだ。

とにちなみ、くちばしに糸をくわえたツルを描いた。安楽岡さんは「ツルは日本の鳥として広く知られており、今後の世界展開を考えてデザインに取り入れた」と明かす。新たな生地の生産は桐生市内の織物会社が受託してくれることになり、伝統が途絶える事態は回避の見通しが立った。
7月29、30日に館林市内で一般向けのイベントを開催したところ「多くの来場があった」(安楽岡さん)と、強い手応えを感じた。また、今月17日にあった市内のアサヒ飲料工場の一一般公開で、スタッフTシャツの袖先のデザインに模様が採用された。